

のにあらずと雖も、荒唐無稽の神奇談を徒らに盲信するものに
あらず、地理山勢の美を賞せんか、暫く珠探の事跡を尋討するを
やめ須らく讃岐奇材、百二十年前の萬有學者、平賀源内の薰陶
されし風景なるを知れ、源内の玉の浦に對する風景眼と着想は
如何ん、峨々たる五劍山峯、以て天體明星辰を觀るの天文臺た
るの感を有し、海波渺々たる播州洋の水、曾て是歐洲大陸の彼
岸を洗ひしものたるの觀ぜしならん、何人の撰に係るか志渡浦
十二景を題目す、八栗層雲、志渡寺晚鐘、高島の晴嵐、惠遠鳴、
鹽竈の夕煙、神池の群螢、津村の牧笛、珠島の秋の月、八浦漁
舟、屋島の暮雪、汀原の白鷗、海士野夜雨と、夫れ風景眼の狹
瞳にして着想の平凡なる撰者の見地以て窺ふに足ると雖も畫題
としてすつべくもあらず。

舟出して今こそ見つれ玉の浦はなれ小島の秋の夜の月

(大納言忠玉)

汐風や遠よる千鳥正の浦のはなれ小島に友誘ふ聲

(公 朝)

汐みちて島の數そふ房崎の入江入江のまつものむらたち

(僧 行基)

客舟一泊砂濱、 波上風明浮月輪

遺哀千年海中王、 片宵清影屬何人

(江村宋眠)

八栗山、四國靈所八十五番の札所にして、五劍山千手院の在る
所延歴年間弘法大師の開基にして、山上より四方を眺望すれば

八ヶ國の景を一眸の間に收むを得、故に往古八國寺の名あり、
五劍山、天下名山多し、富士山の如き其冠たる者海内奇峯に富
む鋸山の如き其一に居る、名山と奇峯と併て之れを兼ねるもの
我五劍山に於て見る。

峰分五劍挿雲端雨淬風磨影自寒 白日南高溟紫氣 何人携得倚
天看

(尾池相陽)

五振の劍身嶄然として中天を凌ぐ、知らず何の恨ぞ、天を刺ん
とす、突屹山、疑峨たる山勢は多く是れ奇岩怪石、或は疑ふ、
神削鬼斧の痕、全山一點の塵を受けず、半塊の土を蒙むらず、
夫れ名山たるの所以奇峯たるの所以。

買 言 葉

は せ が は

野郎! と云ふのが賣言葉なら、何んだいべらぼうーと掛る言
葉が買言葉である。

この賣言葉と買言葉とは喧嘩の場合、物の賣買ばかりに限られ
無い、この水彩畫に關しても痛切に用ふと面白い場合がある、
が水彩畫には賣言葉と云ふものが少ない様である、水彩畫に就
ての葉買言と云ふことに字を並べて見やう、一體斯なことを喋
るのも、すでに野暮かも知れぬ、野暮と云ふ人は野暮だと云ふ
がよい、そんな事に買言葉をつられる必要が無いから、いよく
買言葉を吐く。

『みづる』の四十八が手近かにあつたので、外の處は嘴を入れ

無い、寄書のところを見る、買言葉だ、「余の水彩畫の初め」と申す文句の内に、吾も斯の如く上手になりたい、然し人間は何事も勉強せれば上手になれるものでないのだから、吾々もこれより一生懸命になつてやろうと思ひ、これより前よりも一層勉めよ勵んだ云々と、今はさだめて上達せられて居られやう、そんな時に限つて上達するのが見える、けれども同文の終りに「水畫の君よ永久に導き給へ」とは、君水畫を導く位の決心で無けりや大成巧はむづかしいよ。四十九に『上手』と云ふのがある成程、そうだと、上手になつて終ふのは、彼は畫が上手だと噂される、自分からも得意になる、奮發する、益々持ち上げられる、遂には自ら畫家を以て任じ、また人も許す様になる、かくして眞實に上手に成つてゆくのだ、何事でもそうだが周圍の人に持上げられて受動的に上手になるのは、ことに畫は最も甚しい。『研究所日記』を読むと、雨村氏は琵琶歌の得意な人で畫も得意に描いてる人と思つた、望月氏に對する鈴木氏の言ひ草が面白い、ブリたきや持つて行き給へ、僕も畫架よりブリの方が大切な品物だ、鈴木さんのオヤジさんは素敵な人だ、察するに錠さんは情の深い天真な圖を描く情の人だろう。

この度は五十の『最新の印象』に就て眞面目な僕の意見を聞かす、要するに少々買言葉を交へなけりやならぬ、第一最新の印象で印象の意味はあらうが最新の意味が解からぬ、近頃文章世界にそんな題目で書いて居るが、あれは最新と思ふが、そこで、繪畫と云ふものはことに西洋畫、自然の聲を重きに置かな

けりやならぬ、人間の聲は第二位にも第三位にも下る奈邊に置かなけりやならぬ、人の心裡を深く描くと云ふことは、終極は人生に期すと云ふのは實際だが、人の心裡と云ふことは微細に研究して初めて悟るのだ、こゝを以て見ても自然を第一位に置くことは明白である、君の云ふもつと都會を觀察して人の心裡を深く描き出すことは、自然の聲を聞きて田園の聲をききて後のことであるから都會の聲も人間の聲も少いのでよいと思ふ、技巧と態度兩方ともそなへる人は眞の畫家たる價值がある。次にケーさんの『日誌』の末方は畫を描く人の個性が現はれて羨ましい、僕も七八人の友達と寫生旅行でもする時はいつも同感である。五十に就ては斯なものだ、四十七の『始ての寫生』に、これでもワツトマンと腹に思つた等ふるつて居る、察するに三時間もかかつた繪だと云ふが、家へ持つて歸つて見ると寒色だらけてあつただろう、佐藤君の『我が寫生』は『みづゑ』に對するお世辭見たいで嫌だつた。五十一の『流行の弊』は水彩畫にとつて大した影響も無いだろう、何にしる一寸と繪葉書店へでも行くと水彩畫らしいものが一つや二つは必ず掲げてある、或一部分の人を茶毒することは大したものだろう、眞實の原畫ですらあやしい畫家のかいたものを、版がまた粗末であるから、出來上つた畫は原畫のゲの字の趣もない、地方の人の畫を習ふと殆ど唯一の手本となるのであるから實に危険である、これはまぬがれない現象である、水彩畫もこゝに到つて罪深い事である。かく、こんな買言葉を喋つたついでに、今年の一月から六月ま

で半ヶ年の寄書欄を見るとあまり振は無い、が前、前々に較べると進境がある、注目すべきは後半期である、北斗さんや榎の人さん、どしどし研究した新しい事を聞かして下さい。(完)

一八の花

神奈川 山上 霞 峯

小雨降る日！ 川合通ひのがた馬車の通る齋藤分の町はずれ、雨に濡れしの色を九ツ切にスケッチし初める、近所に泥いたづらをし居た小供等が直ぐ集つてくる、肥料車を引いた田舎の人迄も車をとめて見る(是は……なんですか皆!!!輸出になるのですか)と突然問ひ懸ける人が有る、自分は面白い馬が出来た時故唯(いゝ)と答う(へエ内地でも賣れますかれ)と又煩さく問ひかける、自分は初めて振返つて見ると四十位な商人體な人だ(僕は賣りやあません)と輸出畫に見られたり賣り畫と見られた腹いせにそつげなく答へると、其人も氣まりが悪くなつたと見へていつか居なくなつた、雨はいつしか止んで、初夏の暖い光りが雲間から洩れて彼方の草家の家根の上に咲いて居る一八の花の色が冴へた。

無題 錄

葵 沼 猛

水繪で人物を描く人は甚だ少ない、水彩畫家とならんとするもの皆風景畫さい研究すれば充分であると思ふて、人體を研究して其の奥儀を極めたる人は甚だ少數である、何にしる皆無と

云ふても過言ではあるまいと思ふ、先づ文部省展覽會や、白馬會、太平洋畫會の展覽會等へ往つて見るに、水彩畫の肖像畫出品の少ないのが實に遺憾な譯である、勿論水繪で人物を畫くと云ふのは中々六かしい事である、油繪で何んでもないお茶の粉の處が水彩では一寸出来ない場合が幾らもある、余も『みつゑ』を購讀する以前は木炭と油繪で斯究して居たから多少話せるのだ、水繪の六かしいと云ふ處は調子が思ふ通り出来ないのと、骨格を完全に描く事の困難なる事である、しかし研究次第次第で出来ない事はない筈である、昨秋の文部省展覽會出品中夏目七策氏の「農夫」等は敬服の至りである、又今春太平洋畫會へ出品されたやはり同氏の作「お稽古」等も、思切つて生々した色が使つてあるので之れも面白く拜見した、全く大下先生のお話の通り、夏目氏は人物に妙を得て居られる様だ、否な研究の程は多謝する次第である、余も現時大に死力を盡して研究して居る、何にしる繪畫は自由藝術美であつて、あらゆる自然美は寫して以て藝術美をなし得るので、只畫家その人の手腕巧拙如何によつて美の程度を異なるのみであから、自然美を寫さんとする諸兄弟には面倒なる理屈は無用だ、只自然を愛する一念と、何處までも忠實に觀察して趣味のある自然美を表現する事が肝要であると思ふ、口先ばかりの鼓學者ならいざ知らず藝術はどこまでも神聖であるから、自然を愛する諸兄弟よ、技に優れたいといふ大野心を以て何處までも眞面目に研究されん事を希望して終を告ぐ。